東奥日報 1999年11月27日(土) 夕刊 6面 掲載

中東の日本研究拠点・カイロ大学

▼上▲

長野 隆

■勤勉でレベル高い学生■

私がエジプトのカイロ空港に降り立ったのは昨年の十月二日。外務省の外郭団体である国際交流基金の派遣教授プログラムで、カイロ大学文学部日本語日本文学科の大学院客員教授として、まる一年間、教壇に立つためであった。

数冊の書物で国情のあらましはなめていたものの、古代エジプトに始まり、原始キリスト教、そして言うまでもなく今やイスラム世界最大の大気に覆いつくされたこの国の実情は知るよしもなく、全くの素人で、空港に降り立ってから数カ月、何かしら息詰まるような興奮と緊張を強いられ、生活の一コマ一コマを探るようにして、次第に地に足のつく自分を意識していく毎日であった。

私の住むフラット（マンション）は、ナイル川西岸沿いの二十四階、部屋の反対の窓からは、近景に大カイロ大学を擁し、遠景にギザのピラミッドを眺望する、まさに圧巻のロケーションにあった。その住まいから一年、週に四日間のペースで、大学に足を運んだわけである。

連日蒼天の川岸からは、毎夜のごとくイスラミックな音と踊りの饗（きょう）宴が聞こえ、日々五回のアザーン（お祈りの呼びかけ）、川の東岸に遠く聳（そび）えるモスク（イスラム寺院）の偉観、全く、しばしの日常を攪（かく）乱されるような、めざましい異国情緒を覚えさせられた。

それでも、日々の務めである大学への出勤は、私に身についた生活感覚を次第に呼び寄せ、一刻一刻の慣れと親しみを体にきざみつけはじめたのである。

カイロ大学の学生数は十六万、文学部だけでも二万人という途方もない規模で、中東・アフリカ地域最大の学問の拠点である。大学環境は決して上等とは言えないが、廊下や階段に溢（あふ）れんばかりの学生たちは、しごく勤勉で、その中でも選（え）りすぐられた日本語日本文学科の学生たちのレベルは、極めて高い。学部のわずか二年生たらずの彼らの口からすべり出す上質の日本語に、私は、初め、自分の耳を疑ったほどだ。気立ても、多くは、いたって柔和。日常の規律にきびしい国柄ならではの、無言のしつけと見るべきだろうか。あるいは、その最高学府に学ぶ者につちかわれた教養のにじみなのか。

カイロ大学構内

ともかく、このカイロ大学の大学院の学生十数人を対象に、日本文学の講義と指導をするのが私の務めである。一日三時間の授業は夕方四時から始まり、私に与えられた四コマは、まず「文学テキスト」に太宰治、「研究方法論」に萩原朔太郎、そして「日本文学史」に、「仮題研究」指導、の四つである。目を輝かせる学生たちを前に、初めは探るように、次第に手ごたえを確かめるようにして、そしてついには力弁と議論をたたかわせるように講義は進められていった。

講義のあとは、毎週のように川沿いのレストランに誘い、夕食をともにすることも多かった。川に横付けされたカフェレストランの大きな窓から、夜景にたゆたうゆるやかなナイル川の流れを眺め、ぼく一人はビールに喉（のど）をうるおし、互いの歓談に一日の労をいやしあった記憶は、今もって忘れることはできない。

（弘大教育学部教授）

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです